

中国における郷村観光の展開と「農家楽」の実態分析 ー広西チワン族自治区桂林市恭城県を事例としてー

鐘 雲 瓊[†]・秋山邦裕

(農業経営学教室)

2016 年 1 月 26 日 受理

要 約

郷村観光は中国における「新農村建設」や「三農問題」解決の有効手段とされ、全国各地で積極的に展開されている。「農家楽」は郷村観光の典型的な代表の一つである。本研究では、広西チワン族自治区桂林市恭城県紅岩村を調査対象に取り上げ、社会主義新農村建設契機に、家庭用メタンガスの導入による農業生産方式の転換と郷村観光の展開経緯と農家楽の実態は①紅岩村の農家楽は家庭用メタンガスの導入による生態家園づくりと「新農村建設」をベースとして展開してきたこと、②農家楽の担い手は主に村の農家であり、外来投資者が少ないこと、③農家の所得を増加させること、④行政によって二重構成で管理、運営されていることを明らかにするとともに、今後の課題を検討する。

キーワード：メタンガス 郷村観光 農家楽 新農村建設

はじめに

中国では、1978 年に「改革開放政策」が提唱され、「豊かになれるものから、豊かになる」という「先富論」のもと、沿岸部大都市を中心に経済発展を図ってきた。そして、中国の GDP 成長率は、2011 年には前年比 9.3% 増の 4.7 兆 2,882 億元となり、日本を抜き、アメリカに次ぐ世界第 2 位の経済国になった⁽¹⁾。しかし、急速な経済発展に伴い、過度の開発による自然環境の破壊や都市部と農村部の格差の拡大、農民の都市部に出稼ぎによる農村地域の過疎化など、様々な問題が起きている。⁽²⁾

都市部においては経済の発展とともに、住民の生活水準が向上し、物質の豊かさだけでなく、心の豊かさも求めるようになった。1995 年の週 2 休制、1999 年の分散型長期休暇制度の導入、車の普及と農村地域の交通状況の改善、都市環境の悪化などの要因により、都市住民の観光観念も変わり、観光名所の代わりに自然環境の豊かな農山村を訪ねる「郷村観光」がブームになった。また、2000 年代以降、「三農問題」（農業の低生産性、農村の低開発性、農民の貧困）とその是正に向けた「新農村建設」⁽³⁾の推進手段として、郷村観光が位置づけられるようになり、

政府の政策としても積極的に進められるになった。

1990 年代以降、中国における郷村観光は発展し、近年では拠点数の増加とともに経営規模の拡大、形態の多様化がみられる。2013 年には、全国の郷村観光を行う郷村は 9 万を超え、経営主体は 190 万に達し、営業収入は 2,700 億元を超え、観光客は年間延べ 9 億人に及び、3000 万の就業機会を創造した。2014 年には、郷村観光の観光客は 1.2 億人に増加し、観光客の 30% を占めている。2014 年の郷村観光は 3,200 億元の収入を生み出し、3,300 万人の農民が利益を受けた。今まで、全国には 200 万か所の農家楽があり、10 万か所以上の特色を持つ鎮、全国モデルが 149 県、モデル地域が 383 か所ある。⁽⁴⁾

中国では、郷村観光に関する研究が少なくない。たとえば、姚素英は、郷村観光の概念、分類、効果について論じ、郷村観光が労働力分散や農村経済構造の調整など、農村の経済促進効果があると指摘した。また、張広帥は郷村観光の定義と中国の新農村建設における郷村観光の重要性を指摘した。周晋は郷村観光のための施設の増加による自然環境の破壊や郷村観光の特徴の消失という問題を取り上げ、その対策を述べた。

日本では、中国の郷村観光に関する研究もある。例えば、

[†]：連絡責任者：鐘 雲 瓊（農学研究科農業経営学研究室）

Tel: 080-4394-8646, E-mail: yunqiong2hong@gmail.com

⁽¹⁾ 中国統計年鑑 2012 年。

⁽²⁾ 中国において「都市」（城市）とは、「中華人民共和国城市規劃法」に基づき設立された「直轄市」、「市（地級市・県級市）」及び「鎮」を指す。鎮は、農村地域の中でも、商工業が一定程度発達し、非農業人口が比較的集中している地域を都市の区分として指定しているものである。これらを除く「郷」が農村に相当する。中国語では「都市化」を「城鎮化」と表記している。2011 年末の中国の総人口は、13 億 4,735 万人。

⁽³⁾ 社会主義新農村建設とは、2006 年に中国「第十一回五か年計画」において定められた、農業・農村の活性化を図り「三農問題」の解決を求めるプロジェクトで、都市と農村の経済・社会発展を調和させることを維持した上で、「生産を発展させ、生活を豊かにし、気風を改善させ、村を美しくし、民主的管理を行う」ことを目標にしている。

⁽⁴⁾ www.baidu.com

高田晋史は中国の懷柔地区合作社と有限会社の事例を調査し、地域経営郷村観光の組織構造と運営について分析した。展鳳彬は、郷村観光を通じた雇用の創出や所得向上、農村の経済発展について指摘し、インフラ整備の推進や都市・農村交流の効果について調査した。しかし、それらのように主に郷村観光の概念、形態、発展モデル、政策などの研究が多いが、メタンガスを利用し、生態家園づくりなどの方法と連携して、農山村の郷村観光を展開することに関する研究はほとんどなされていない状況である。

本研究では、社会主義新農村建設を契機に、家庭用メタンガスの導入による農業生産方式の転換から郷村観光の展開まで取り組んできた広西チワン族自治区桂林市恭城県紅岩村を調査対象として取り上げ、その郷村観光の展開経緯を明らかにするとともに、農家楽⁵⁾の実態と今後の課題を検討する。本研究で取り上げる紅岩村は中央政府が指定した郷村観光モデル地区であり、郷村観光の発展に力を入れた、いわば、中国における郷村観光の先進地域である。

I 郷村観光の定義と経営類型

1. 郷村観光の定義

郷村観光の定義については、これまで様々な解釈が行われている。しかし、明確な定義はまだ定まっていない状態である。農業観光、エコ観光、民俗観光などの類義語も多数用いられている。

筆者は郷村観光の定義を以下のように理解している。まず、郷村観光が行われる場所は、必ず郷村地域である。郷村地域は郷村観光の媒介で、郷村地域で行われている活動は郷村観光に限定されるわけではないが、郷村観光は必ず郷村地域で行われる。次に観光資源である。郷村は豊かな自然資源、民俗風情、伝統文化、農耕文化などの資源を持っている。それらの自然資源と文化資源とを融合して、郷村地域における特有の社会文化的な雰囲気形成している。郷村観光はその総合的な資源を体験を通して観光客に提供する。そして、郷村観光の対象である。鉄筋コンクリートの都市で生活している都市住民にとって、郷村地域は心と体をリラックスさせることのできる場所である。そのため、都市化の程度が高いところの住民は郷村観光へ参加する意欲が高い。最後に、郷村観光を行う主体は郷村住民である。郷村住民は郷村の構成要素で、自身の有利な要素を利用して、郷村観光事業に参加する。

筆者は肖佑興(2006)の郷村観光についての以下の記述、「郷村観光は、郷村の空間環境という名目の下に、郷村独特の生産生態、民俗風土、生活様式、風景、家屋、郷村文化などを対象として、都市と農村の相違を利用して、計画と設定と商品を組み合わせている。そして、主に観光、遊覧、娯楽、レジャー、長期休暇を過ごすことと、ショッピングが一体となった観光形態である」は妥当であると考えている。⁶⁾

2. 郷村観光の経営類型

郷村観光は経営形態から見て、主に「単独農家型」、「複数農家協同型」および「企業・農家連携型」の三つの基本モデルに分けられる。⁷⁾

単独農家型は原初的なモデルであり、農民自らが経営主体となり、自己の家や農場等を改造し、自主的な経営を行う。規模が比較的小さくて、提供可能な産品、サービス内容は限定されているという特徴がある。しかし、それによって、農村の余剰労働力の雇用の受け皿となり、集落の経済発展に貢献している。このモデルは「農家楽」の典型である。

複数農家協同型は、地域の農家の連携・協同経営により農村観光の開発を行うものである。農民は企業が農村観光開発に介入することに一定の抵抗感があるため、大多数の農家は企業に資金や土地を提供することを望まず、地域の模範的農家主導による開発に追随する傾向がある。このモデルでは、資本投入量が少ないため、事業規模に限界はあるが、比較的廉価で、農村の素朴な伝統文化・習俗を体験できる。

企業・農家連携型は、企業主導により農村観光事業を開発、経営及び管理し、農家がこれに参入する点を特徴とし、通常は企業が農家の土地経営権を買い取り、事業利益を農家に分配する方式を採用している。当該地域の資源や未利用の農家資産、余剰労働力をフルに活用することにより、バラエティに富んだ農村観光のメニューが生み出されるとともに、企業の総合的な管理を通じて、利用客の受入れに当たる農家のサービス水準の確保と向上が図られる。

II 恭城県における郷村観光の展開と「恭城モデル」の実態分析

1. 恭城や族自治県の概況

恭城や族自治県は古い歴史を持つ県であり、西暦618年に設立された。広西チワン族自治区の東北に位置し、湖南省と接している。桂林市との距離は108キロメートルであり、面積は2,149平方キロメートルで、そのうち山地面積が70%を占めている。境界内の平均海拔は900m、年間降雨量は1,490mm、平均気温は19.7℃、湿度は70～80%である。このような自然条件は柿、みかんなどの果物の生産に最適であり、紅岩村の「月柿」は中国の有名なブランドの一つとしてあげられている。全県には3鎮6郷117村があり、ヤオ族、漢族、チワン族、ミャオ族、回族など12民族の人が集まっている。2015年現在で総人口は28.5万人、その中ヤオ族が16.5万人と57.8%を占めている。1990年に少数民族県として恭城ヤオ族自治県が創立

⁵⁾ 農家楽とは農村の文化、景観、生態環境、生産活動及び伝統的な民族習慣を資源とし、娯楽、レジャーを融合した観光活動である。

⁶⁾ 張、広帥「郷村観光の定義とその重要性に関する一考察」。

⁷⁾ 石川 武彦「中国における休閒農業の発展状況 — 陽澄湖大闸蟹を活用した「漁家楽」の事例 — 」2015年。

された。(図1)



図1 恭城県の地理的位置図

資料出所: http://map.mapbar.com/al_guilin_gongcheng_map

2. 「恭城モデル」の概要

恭城ヤオ族自治県は広西チワン族自治区の最も貧困な県の一つであった。1983年以前、恭城県の農家は主に稲、トウモロコシ、サツマイモ、ジャガイモなどを栽培していた。一人当たりの水田面積は極めて小さい、生産された米は家族半年分の食糧に満たなかった。一人当たりの所得が約400元であり、多くの人は国からの援助に頼ってきた。70～80年代には、恭城県は石炭などのエネルギーが少ないため、山林の過度伐採による自然環境の破壊が多発した。恭城県は1983年から、農民エネルギー不足の問題の解決、生態環境の保護を目的として、「畜産をベースにメタンガス利用をリンクさせるとともに、栽培に重点を置く」ことを発展戦略としてきた。

この取組は、「畜産+メタンガス+栽培」三位一体の生態農業の方式を確立し、生態環境の改善を図ることにより、農村経済の持続的発展の実現に大きく寄与したとして、全国的な評価を集めている。この三位一体の生態農業の方式は「恭城モデル」と呼ばれている。20世紀に入って、恭城は農業産業構造の改革と生態農業、郷村観光とを結合させて、「畜産+メタンガス+栽培」の三位一体の生態農業の方式を「畜産+メタンガス+栽培+加工+観光」に発展させた。2009年には、県全体の果樹生産が栽培面積約29,000ha、生産量65万トンに達した。各戸の沼気池は総数6.3万基、沼気池導入率は89%と全国第1位となっている。

(1) 「三位一体」の農業生産方式

90年代に恭城県では「畜産+メタンガス+栽培」の「三位一体」の農業生産方式が始まった。県政府の指導の下で、村民たちは山を開墾して、柿、みかんなどの果物の栽培を行った。また、自宅の建物の傍に豚小屋を作って、養豚業も始まった。メタンガス池は豚小屋の隣にある。人と豚の糞尿、生活ごみなどをメタンガス池に投入して、高温発酵、

殺菌によって、メタンガス、メタンガス残物が出てくる。メタンガスはご飯を作ることと照明に使われており、メタンガスの残物は肥料として果物の栽培に使われた(図2)。この肥料の使用によって、農作物の害虫発生の減少と共に、土壌の地力を高めた。農薬を使わないため、生産された果物は無公害の果物である。この「三位一体」の農業生産方式は石炭などのエネルギーの節約と共に、環境も保護した。

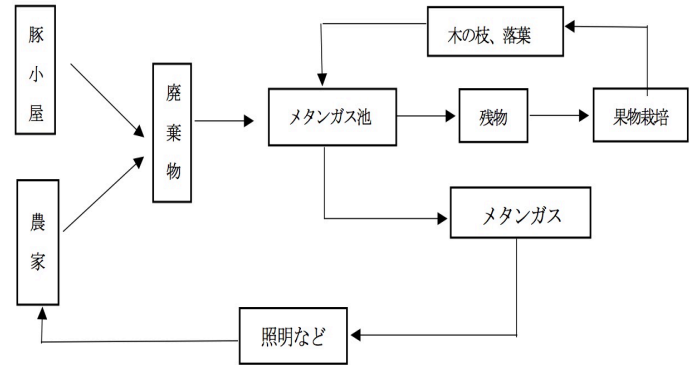


図2 「三位一体」モデルの概要図

資料出所: 聞き取りにより筆者作成

(2) 「五位一体」の農業生産方式

20世紀から生態農業に観光業、加工業を加え、新しい持続可能な発展モデルを構築していた。(図3)。

まず、畜産業の豚などの動物の糞尿はメタンガスの原料になって、メタンガス池に発酵させており、出てきたメタンガスが郷村観光を行う地域の農家に提供して、照明などに使われている。農家の生活ごみや観光客の廃棄物はメタンガスの原料になっている。

また、発酵されたメタンガスの残物が肥料として、果樹の栽培に使われている。地力を高めたため、良質な果物ができる。果物を加工したり、直接に観光客に販売したりすることができる。果樹園観光、果物をもぐことを観光資源として、観光客を引き付けている。

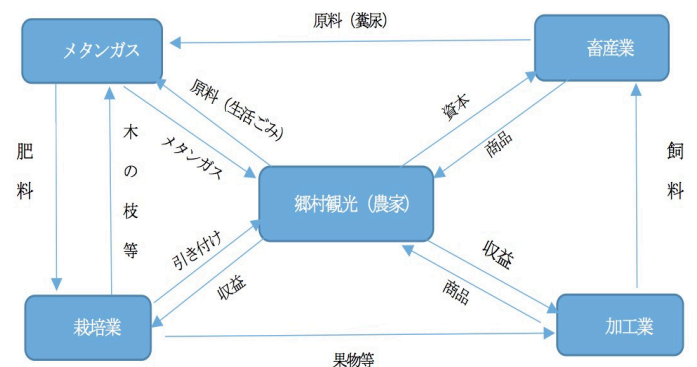


図3 「五位一体」モデルの概要

資料出所: 聞き取りにより筆者作成

最後に、加工された果物は、市場であるいは観光客に販売されており、残った屑などの残物は豚の餌として使われている。もちろん、郷村観光の発展は畜産業、加工業、栽培業に資金と収益を提供している。

「恭城モデル」を通じて、恭城県に大きい影響があった。まず、農村住民一人当たりの所得は増加してきた。1997年の1,246元から2014年の12,000元になっており、約10倍に増加している（図4）。

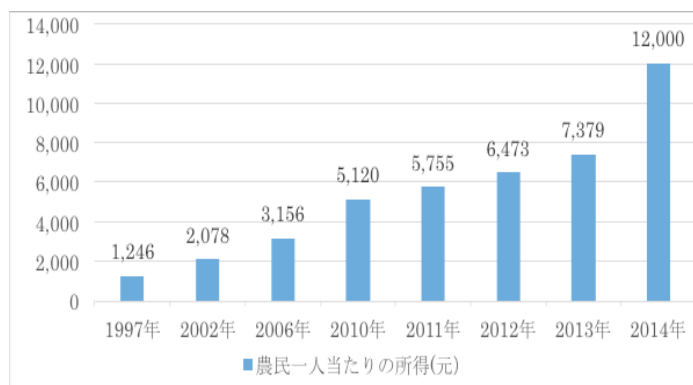


図4 恭城県における農民一人当たりの所得推移

資料出所：恭城県政府の仕事報告により筆者作成

また、恭城県の生態環境もよくなった。80年代前、過度伐採のため、恭城県の森林の比率は44.1%しかなかった。水土流出による山崩れ、洪水などの災害が多かった。1983年に恭城県政府は「畜産をベースにメタンガス利用をリンクさせるとともに、栽培に重点を置く」ことを発展戦略としてきた。以前までの水稻、サトイモ、ジャガイモの栽培は果樹栽培に転換した。果樹の面積は2008年の37.8万ム⁸⁾から2014年の51.61万ムに増加している。また、政府が「耕地を元の森林へ還元させる」という政策をするによって、2015年に恭城県の森林の比率は81.0%に増加した。豊かな自然環境は恭城県の郷村観光の展開の基礎を作った。

表1 恭城県の森林の比率表

年	1985	1990	1995	2000	2007	2009	2015
森林の率	44.1%	54.3%	72.9%	74.4%	77.0%	77.1%	81.0%

Ⅲ 恭城県における農家楽の実態分析

3.1 恭城県における農家楽の展開

恭城県蓮花鎮にある紅岩村の農家楽は代表的なものである。紅岩村は桂林市恭城県の南に位置して、桂林と123 km離れている。地形は主に丘陵と山地であり、南、北、西は山林に取り囲まれている。面積は6.8平方キロメートル、海拔は145 m－311.9 m、平均温度は19.7度、降雨量は

1,490 mmで、一年中で春のようである。このような自然条件は果樹の生産に最適であり、恭城月柿は全国で有名なブランドとしてあげられている。紅岩村の果樹の栽培は主要な収入源となっており、果樹は柿が多い。現在、柿の面積は5,000 ム、平均一人当たり2 ムあり、隣の蓮花村とつながり、「万ム柿園」になる。年平均6,600 キロの果物を生産し、一人当たりの収入は8000 元となっている。2015年現在、人口は408人で占められ、60%がヤオ族、20%チワン族、20%が漢族である。村には、主に朱（70%）、韦（20%）姓の人で、各自で同じの家族である。1990年に果樹の栽培を始め、1998年に、村すべての耕作地で果樹の栽培に変えた。それによって、貧困からの脱出が可能になり、今の生態家園づくりと郷村観光事業の展開の基礎が整った。

2003年、紅岩村は恭城県政府による「生態家園づくり」⁹⁾のモデルケースと設定され、統一計画が策定された。政府は1,100 万元を投資し、風雨橋、梅花杭などのヤウ族の特色を持った建物を修理し、また、駐車場、広場、病院などのインフラ整備を行った。2003年9月、31棟のヤウ族特色を持つ建物が出来上がった。同年、第一回「月柿の祭り」が開催され、大量の観光客を引き付けた。かつて静かだった集落は都市部から来る人が多くなり、都市との交流が拡大した。交通の便利さ、美しい景色や、独自の民族文化などが観光客に良い印象を残した。そのため、家族や親友を連れて、集落で休日を過ごす都市住民が現れた。彼らは集落で果物を摘み、手作り「油茶」に挑戦したり、釣りをしたり、また、地元の農家でヤオ族料理を楽しんでいる。最初は客向けのレストランはないので、農家で農家の家族と一緒に食べ、ある程度の食事代を出す形態であった。その後、来客の増加に伴い、特に農繁期、農家が対応できなくなったため、初めて来訪者向けの農家レストランが開かれた。2005年に、紅岩村は「全国農業観光モデル点」になって、80万人の観光客を引き付け、農民の一人当たりの旅行収入が約2,000 元に増加した。2006年、「全国十大魅力郷村」になった。今紅岩村に農家楽は80か所があり、観光客が平均年間平均延べ20万人、農民一人当たり観光の収入が2 万元に達した。2011年、「全国郷村観光と休閒農業モデル点」になっている。

3.2 紅岩村における農家楽の経営管理形態

紅岩村の農家楽には、その経営管理の形態に特徴がある。図5のように、恭城県政府は統一管理機関として、紅岩村の農家楽全体の問題解決、計画立案、統一管理などを行っている。蓮花鎮政府は県政府の仕事に協力するだけである。県政府は「月柿事務所」を設立し、一年一回の柿祭りの計画、宣伝、資金募集などを行っている。また、紅岩村の農家楽の運営、日常管理、人材育成などは紅岩村の農

⁸⁾ ムは中国の面積単位である。1 ムは約6.67 アール。

⁹⁾ 生態家園づくりについて、中国では「生態家園富民計画」と言う。これは中国農業部が2001年から実施した環境政策のことである。

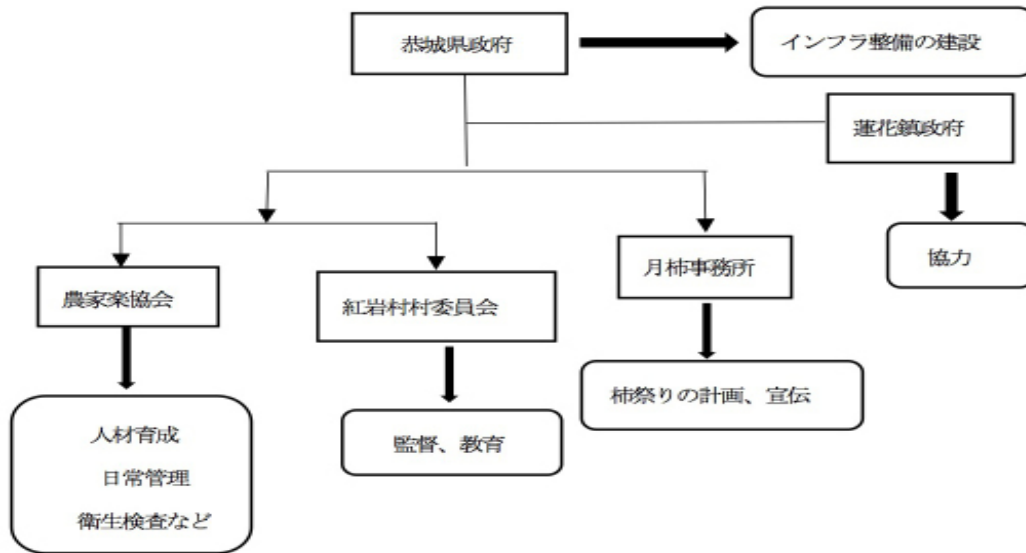


図5 紅岩村の農家楽の経営管理形態

資料出所：聞き取りより筆者作成

家楽協会が行っている。紅岩村村委員会は農家楽協会の仕事に対して監督、また村住民に対して教育、監督、政府機関との政策調整などを行っている。しかし、農家楽協会の会長と村委員会の村長は同一の人となっている。このように、紅岩村の農家楽は行政によって二重構成（県系統と村系統）で管理、運営されている。

3.3 紅岩村の観光客と農家楽の運営者の構成

紅岩村の農家楽は2003年から今まで、延べ約250万人の観光客を受け入れ、年間平均の客数は約20万人である。観光客の構成には、三つのタイプがある（図6）。一つは全国から来る各地の政府機関、学校の人であり、20%を占めている。彼らは紅岩村の新農村建設の経験、生態農業と郷村観光発展の経験、共産党の党性教育などの勉強にきた。もう一つは桂林、南寧など都市の旅行会社が連れて来る団体観光客で、30%である。もう一つは恭城県あるいは隣県の個人観光客で、週末に来て一日帰りタイプであり、50%を占めている。

今、紅岩村には80ヶ所の農家楽がある。その農家楽の運営者には二つタイプがある。（図7）一つは集落の住民であり、76ヶ所あって、自己の家を利用して、農家楽を経営している。もう一つの外来投資者によるものは4ヶ所があり、集落住民の家あるいは政府の建物をリースして、農家楽を経営している。

図6 紅岩村の農家楽の観光客の構成

資料出所：聞き取りにより筆者作成

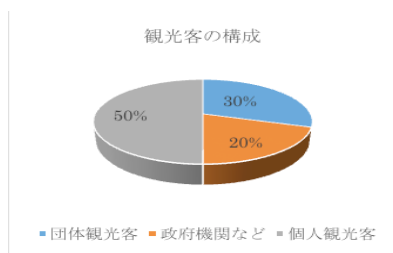
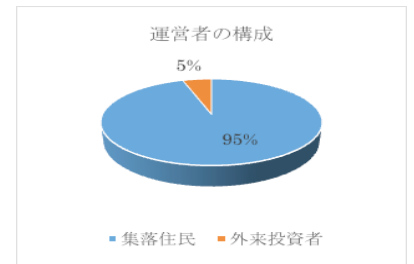


図7 紅岩村の農家楽の運営者の構成

資料出所：聞き取りにより筆者作成



IV 紅岩村における農家楽の実態分析

4.1 「培民楼」

「培民楼」は農家の容氏が経営している農家楽であり、集落の前部、村の大通り茶川の横に位置し、ヤオ族建築「風雨橋」から200メートル程離れたところにある（写真1）。

容氏は今年55歳で、家族は本人、夫、舅と姑、息子の5人である。夫は村の支部書記と農家楽協会の会長であり、舅は元の農家楽協会の会長だった。今、15ムの柿を栽培している。農家楽を行う前は、家族



写真1：培民楼（筆者撮影）

の収入は主に柿栽培と夫の給料であった。2003年、紅岩村の「生態家園づくり」の展開の際、家族4万元と政府が無利子で貸し付けた4万元を使って新しい家を建てた。3階建て、レストランの最大収容人数100人、宿泊施設は最大12人の家である。開業する前に、村農家楽協会のシェフ育成と接客サービスのトレーニングを受けた。

「培民楼」農家楽の内容は、①伝統的なヤオ族の農家料理が食べられること、②恭城伝統なお茶―「油茶」作りの体験ができること、③ヤオ族の日常生活や農業体験ができること、④家庭用メタンガスの見学、メタンガスを使って農家料理の体験もできること、である。その他に、集落の中の風雨橋や公共の観光施設、釣り場や、梅花杭などすべて無料で利用でき、祝日には、集落の民族舞踊などの演出もある。

客層は70%以上が桂林市や南寧市の旅行会社が連れてきた団体の観光客である。夫は農家楽協会の会長なので、団体の観光客が来たとき、農家楽協会が観光客を配当する際、まず容氏の家に配当する。また、中国中央テレビのメディアの取材を受けたため、隣県から訪れる一日帰りタイプの観光客も多い。現在、週末の二日間で、観光客が40人ぐらいあり、3月の桃花節と10月の柿祭りのときには、一日だけで100人もある。しかし、12月から3月の間に、1日で一人も来ないときもある。利用額については、一泊2食で忙しいときは120元、普通は80元である。年間の平均収入は20万元であり、家庭収入の75%ぐらいを占め、村の中で多い方である。現在の難点については、10月などの忙しい時期に従業員が足りないことと冬の時観光客が少ないという問題である。

4.2 「紅岩山荘」

紅岩山荘は外来投資者の熊氏が経営している農家楽で、集落の中間部にあり、村の大通り茶川から1,000メートル離れている。熊氏は今年57歳で、家族は夫婦2人と息子夫婦2人である。熊氏と夫は元々桂林市の工場で働いていた。2006年、夫が定年するとき、故郷の恭城県における農家楽のブームを見て、故郷に帰って農家楽を起業ということを決めた。親戚の10畠の柿園を請負し、政府の建物をリースして起業した。庭付き1,000平方メートルの面積、二階建ての別荘、最大収容人数120人のレストラン、客室10間、収容人数100人の会議室1間がある。(写真2, 3)

農家楽の内容は、①伝統的なヤオ族農家料理が食べられること、②農作業の体験、③政府機関人員に会議室を提供して、政府の新しい政策や共産党の党性教育などを勉強できること、④カラオケや、将棋、マージャンなどもできる

こと、である。

利用額については、「培民楼」と同じ、一人一泊2食で忙しい時は120元、普通は80元である。年間の平均収入は10万元であり、家庭収入の53%ぐらいを占めている。

会議室があるので、「紅岩山荘」の客層の80%は政府機関の職員である。開業当初は地区行政の直接的顧客紹介、政府職員の飲食利用などがあり、安定していた。しかし、行政地区の支援が終了し、さらに2012年12月に中央政府が汚職追放の一環として始めた「八項規定」¹⁰⁾の改革を実施して以来、行政職員の顧客が大量に減少し、また食事の内容も単純化し、それに伴って食事収入が大幅に縮小している。政府には対策を講じてほしいという。



写真2：紅岩山荘



写真3：紅岩山荘の会議室

V まとめ

以上、恭城県における鄉村観光の展開の経緯と農家楽の実態を明らかにした。当初は経済向上の目的として農業生産方式の転換が図られ、果樹栽培を行った。経済向上の後に、環境保全や農村の生活環境の改善のために、家庭用メタンガスの導入と中心した生態家園づくりを行い、「畜産＋メタンガス＋栽培」の三位一体の「恭城モデル」が確立された。そして、独自のヤオ族文化や、豊かな自然風景、万果樹園などに依存して、鄉村観光を行うようになった。すなわち、「畜産＋メタンガス＋栽培＋加工＋観光」という農業生産方式も確立された。

紅岩村の農家楽は2003年から始まり、12年間を経過した。生態家園づくりのモデルケースの開発を契機に、農家楽を始めた。モデルケースだからこそ、独自の特徴と課題がある。

第1に、紅岩村の農家楽は家庭用メタンガスの導入による生態家園づくりと「新農村建設」をベースとして展開してきた。果樹栽培という地域産業の発展や生態家園づくり活動による村の生活環境の改善、美しい自然景色とヤオ族文化は農家楽の基盤になっている。

第2に、農家楽の担い手は主に村の農家であり、外来投資者が少ないことである。紅岩村の人は二つの大きな家族に分けられる。周りの農家楽の経営者は皆親戚であるため、

¹⁰⁾ 習近平就任当初の発言、高級官僚幹部はすべからず贅沢と浪費を廃して質素儉約に努め、実質的な仕事をすべしという指示である。

お互いに助け合い、競争が弱い。地元農家が担い手となり、ヤオ族特有の建物づくりや、伝統文化の再現に積極的に取り組んでいる。

第3に、農家の所得を増加させる。今、紅岩村の一人当たりの観光所得が2,000円で、一人当たりの所得の半分以上を超えている。観光客の受け入れ、お土産の販売などにより、農家の所得を増加させた。また、農家楽事業の拡大に伴い、雇用も生み出しており、村の余剰労働力も吸収する。

第4に、「全国郷村観光と休閒農業のモデル点」として、行政による二重構成（県系統と村系統）で管理、運営されている。県政府は直接に農家楽を統一管理し、農家楽協会は日常の運営と管理を行っている。

紅岩村の課題については、①利用客に対する安全及びサービスの品質を確保するための規範管理の徹底、②農家楽の経営者は主に中・高校卒業であり、農家楽に対する経営理念の理解が後れ、ブランド意識が薄いこと、③農家楽は「農家料理を食べ、農家に泊まる」という段階に止まって、観光項目が少ない、特色がないこと、④政府の支援に依存していることが挙げられる。

参考文献

- [1] 張樹民：「中国郷村観光発展モデルと政策保障研究」中国旅行出版社2010年、pp. 3-113。
 [2] 李星群：「広西チワン族自治区民営観光経済発展問題研究」经济管理出版社2012年、pp. 8-9。

- [3] 年宋書巧：「広西チワン族自治区郷村観光研究」中国環境科学出版社 2006年 pp. 181-183。
 [4] 周 晟・池田孝之：「中国・湖南省における「農家楽」の実態に関する考察—株洲市市域を事例として、」『日本建築学会計画系論文集』2008年。
 [5] 石川武彦：「中国における休閒農業の発展状況 — 陽澄湖大闸蟹を活用した「漁家楽」の事例 —」参議院事務局企画調整室編集・発行、2015年。
 [6] 張広帥：「郷村観光の定義とその重要性に関する一」『考察北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集』、2010年。
 [7] 展鳳彬：「中国の新型観光農家楽—四川省・成都市を事例に一」同志社政策科学研究、2007年。
 [8] 張貴民：「中国における農村空間の商品化とその課題—改革開放以来を中心に—」『愛媛大学教育学部紀要』、2014年。
 [9] 桂 英・橋本卓爾・藤田武弘・山尾政博・細野 賢治：「中国四川省における農家楽を中心とした農村振興」農業市場研究 19(2)、2010年。
 [10] 趙展坤：「各地休閒農業・郷村旅遊發展概況」中国休閒農業網、2007年
 [11] 陳 波：「農業観光政策と観光業おこしのイノベーション —中国西部綠色菜都における農業観光地づくりの事例—」『経済学論纂』中央大学経済学研究会、2011年。

www.zaigc.com 恭城県観光局ホームページ

www.gongcheng.gov.cn 恭城県政府ホームページ

The Development of Rural Tourism and a Reality Analysis of Farm Villages in China -A Case Study of Gongcheng County ,Guangxi Zhuang Autonomous ,China-

Yunqiong ZHONG[†] and Kunihiro AKIYAMA

(Laboratory of Farm Management)

Summary

As a new socialist countryside project takes hold (building new farm villages), effective methods of agriculture, farmers, rural areas, and rural tourism are under active development in China. The farm village is one of the typical manifestations of rural tourism. The development of rural tourism in Gongcheng county is based on building a new socialist countryside project. The local farmers of Gongcheng county use the family firedamp to change their agricultural production methods, and to develop rural tourism. The purpose of this paper is to illustrate the development of rural tourism and the reality of Farm Villages in China, Gongcheng County, Guangxi Zhuang Autonomous. Gongcheng county is the model county of rural tourism in China, 2012 years.

Key words: Firedamp Rural Tourism, Farm Village, New Socialist Countryside

[†]: Correspondence to: Yunqiong Zhong (Laboratory of Farm Management)

Tel: 080-4394-8646, E-mail: yunqiong2hong@gmail.com